

2018 年度秋季
大阪大学 言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会
(大阪大学 言語文化学会 第 54回大会)

2018年10月27日 (土) 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

第 1 室(共通教育 A 棟 3 階 301)

外国人保護者の家庭内言語教育方針
— 母語・母国語・日本語・英語の選択を中心に —

Pankratova Snezhanna (日本語日本文化専攻博士前期課程 2 年)

近年、日本の未就学児施設・小中高校に通う外国人園児・外国人児童生徒が増えている。彼らに対する支援は義務教育を中心に行われており、日本語指導(田中 2015)や母語支援(田・櫻井 2017)が報告されている。しかし、より効果的な支援に必要な要素として、外国人保護者と教員の間での連携が考えられる。また、拙論(パンクラートワ 2018)の調査においても外国人保護者と教員間の情報交換が不十分であることが明らかになった。さらに、保護者の考えを質的に調査した先行研究も少なく、家庭内での教育方針の調査は家庭と教育機関の間での連携に必要不可欠だと考えられる。

そこで、本研究では、日本で子育てをしている外国人保護者の家庭内言語教育方針(Family Language Policy)を調べる。本発表では、保護者へのインタビューのデータに基づいて保護者がどのように母語・母国語・日本語と英語教育の優先順位及び両立を考えているかについて述べ、それをもとに教育現場への示唆を考察する。

本研究の対象者は 1)非漢字圏出身者 2)父母とも同国籍 3)最低片親が日本の大学及び研究機関に所属している 9 つの家庭である。本発表では、その中の一部の家庭へのインタビューから明らかになったことを述べる。

本発表では、保護者の母国語が英語である場合とそうでない場合は英語への考えは多少異なるという調査結果を論じる。また、保護者の将来の移住先への想いと言語選択の関連性に関する調査結果も提示する。

メディアの創造する甲子園の「物語」に関する研究 ～夏の甲子園大会における朝日新聞の社説の分析を中心に～

下田 一成（言語文化専攻博士前期課程1年）

朝日新聞社と日本高等学校野球連盟が主催している夏の全国高等学校野球選手権大会（以下、甲子園大会）は、今年で第100回大会を迎えた。日本の夏の風物詩と評されるほど、その人気には根強いものがある。その一因として、独特の「物語」が発信されていることを指摘する研究者もいる（西原, 2013）。これを踏まえ本研究では、甲子園大会においてメディアが生成する「物語」の構成要素を明らかにし、その「物語」の付与が現実の甲子園大会や選手にどのような影響を与えるのかを考察する。

甲子園大会に関するメディアの研究としては、小椋(1993)、清水(1998)などが挙げられる。いずれの研究も、メディアの創造する甲子園大会の「物語」に言及しているが、2000年以降の社説を分析している研究は少なく、木原ほか(2012)のように比較的新しい記事を分析している研究においても、内容の分析までには至っていない。

今回の発表では、朝日新聞が2013年から2018年にかけて、甲子園大会を取り上げている全ての社説(全13記事)を対象として、どのような物語要素が含まれているかを分析する。さらに、同じ競技としてのプロ野球や、全国高等学校総合体育大会（以下、高校総体）に関する社説とも比較し、検討を試みる。暫定的な結果としては、「記録」「戦争」「友情」などの物語の要素を抽出している。さらに、直接的に物語を示唆する「ドラマ」という言葉を使用した表現を確認することができ、メディアの創作する「がばい旋風」「おらほの学校」などの言葉にも物語を形成する仕掛けがあることを突き止められた。プロ野球に関する社説に存在する物語要素は確認できるものの、甲子園大会と比較すると圧倒的にその数が少ないうえ、高校総体に関する社説は存在していない。これらに鑑みて、やはり甲子園大会の物語の描写は特異であると考えられる。分析を踏まえ、過度な物語の付与が現実の甲子園大会や選手に与える影響について考察する。

ウジェーヌ・アジェの語られないプレ・モダン —「街角の人々」のシリーズを中心に—

久保 和真（言語文化専攻博士後期課程1年）

本発表では、フランス人写真家ウジェーヌ・アジェ（1857-1927）による「街角の人々」のシリーズを取り上げ、アジェの撮影技法の特徴とそれをめぐる諸言説について考察を行いたい。

2000年に開かれた展覧会 *Atget the Pioneer* の試みに象徴されるように、近年のアジェをめぐる研究は、彼がいかに後代の写真家に受容されたかという問題についてますます関心を高めている。上記の展覧会をはじめとして、19世紀末からおよそ戦間期まで活動が続けたアジェを戦後以降の写真家と並置する批評や実践の多くは、アジェの写真をめぐって語られる「近代性」をその根拠とする。例えばいくつかの先行研究は、パリとい

う都市の変化を客観的に記録することを試みたアジェの美学を、ウォーカー・エヴァンスをはじめとするドキュメンタリー・スタイルの写真家らが引き継いだことを指摘することで、アジェの写真における「近代性」を主張してきた。しかしその一方で、そのような美学を下支えする、被写体の選択、撮影の方法論など多くの実践的、技術的な部分において、アジェが19世紀的な特質を保持していたこともまた、多くの論者が認めるところである。

本発表では、キャリアの初期に集中的に撮影されたいわゆる「街角の人々」のシリーズを分析の対象とし、アジェが使用したメディアおよびそれに伴う撮影技法の「前近代的」な特徴を指摘する。さらにヴァルター・ベンヤミンの「写真小史」を議論の手掛かりとして、そうした特徴がいかに語られてきたかあるいは語られてこなかったかという問題に焦点を当てることで、1930年代のアジェの受容における言説形成の在り方について一考を加えたい。

生きづらさのオートエスノグラフィー —LGBTのASD（自閉症スペクトラム障害）者—

林 桂生

「彼ら彼女らは子供を作らない、つまり『生産性』がないのです」—この一節のために、杉田水脈「『LGBT』支援の度が過ぎる」（『新潮45』2018年8月号）が話題になったのは2018年7月のことである。「生産性」の部分のみが注目されたが、問題はそこだけではない。

「実際そんなに差別されているものでしょうか。（…）私自身は気にせず付き合えます」という差別問題の軽視、「生きづらさという観点でいえば、社会的な差別云々よりも、自分たちの親が理解してくれないことのほうがつらい（…）そこさえクリアできれば（…）日本はかなり生きやすい社会」という親子関係への責任転嫁、「そもそも世の中は生きづらく、理不尽なものです。それを自分の力で乗り越える力をつけさせることが教育の目的のはず」と助けを求める声をも封殺しかねない教育観、「マスメディアが（…）報道することが（…）普通に恋愛して結婚できる人まで、『これ（同性愛）でいいんだ』と、不幸な人を増やすことにつながりかねません」と性的少数者を自在に増やせるもの、「不幸な人」であるとする誤謬、「なぜ男と女、二つの性だけではいけないのでしょうか」という固定観念、その他ほぼすべてが不適切な記述に満ちた杉田の文章の「生産性」以外の部分がなぜ論じられないのか。

本発表者はトランスジェンダーであり、このような差別主義の矛先が発達障害にもいつ向けられるかわからないと危惧するASD者でもある。オートエスノグラフィーは社会的コンテキスト内に自己を置くセルフナラティブであり、本発表では杉田の言説を問題なしとする多数派の無関心・無理解という差別についてダブルマイノリティーの立場から考察する。生きづらさがなぜ生じるのかに関しても、本発表者が2018年9月1日に開催した「ASD・Xジェンダーカフェ」の参加者の発言を取り上げて現状への提言を行う。

英文和訳における女性語の増訳から見られる
ジェンダー・アイデンティティの変化
—The Great Gatsby の Myrtle の階級意識をめぐって—

趙 洋（言語文化専攻博士後期課程2年）

ジェンダー・アイデンティティは人種・年齢・階級など色々な要素の多面的な影響の下で能動的に作られたものであると指摘されている。本発表は、英語小説 *The Great Gatsby* において労働者階級の代表例である Myrtle（以下では日本語訳に従いマートルを呼ぶ）という女性キャラクターに関して日本語訳の中で女性語が増訳されている状況を考察し、ジェンダー・アイデンティティとの関連性を実証する。特に、ジェンダー・アイデンティティの重要な構成部分としての階級という要素をめぐり、どのように女性語を増訳することによって、マートルの階級意識の変化を実現するのか、という点に迫ることに重きを置きたい。

発表においては、F・スコット・フィッツジェラルドが執筆した英文小説 *The Great Gatsby* と小川高義による邦訳の『グレート・ギャツビー』を研究対象として、マートルとその話し相手との会話場面を取り上げて検討を行う。

原著の作家の自由な創作と比べると、訳者は原文の意味を尊重しなければならないという翻訳の準則に制限されている。しかし訳者は、「労働者階級の女性はいさぎよい上品な女性語を使わない」、また、「上流階級の女性はいさぎよい女性語を使う」という、読者の脳裏に共有される「常識的」な考えを利用し、「上品な女らしさ」を特徴づけるような女性語を増訳することで、マートルが自分をどのように認知し、階級意識を変化させていくかを読者に伝えることに成功しているといえる。つまり、翻訳版においてマートルのジェンダー・アイデンティティは、自分の居場所と自己認識の変化とともに、「労働者階級の女性」としてのアイデンティティから、「上流階級に所属している女性」という錯覚としてのアイデンティティまで、多様に切り替えられている。特に、ジェンダー・アイデンティティの構成の一環としての階級意識の転換がはっきりと表現される点に、翻訳版の特徴が示されると考えられる。

第2室(共通教育A棟3階 302)

分離不定詞とレトリック —リズムとの関連についてのケーススタディー

福本 広光（言語文化専攻博士前期課程2年）

分離不定詞 (split infinitive) は、現代英語において使用される機会が多くなっている。考えられる理由の一つとして、「分離不定詞は文章をより自然なリズムにする」という効用が注目されるようになったということがある。実際、このことについて言及する文献は数多い。ただ、ほとんどがその事柄の表面的な記述にとどまっている。

Draat (1910)は、「強勢の有無」という観点から、「弱強弱強 (to always keep)」(弱強格)や「弱強弱弱強 (to further acquaint)」などといった、分離不定詞がリズムに貢献しているパターンについて具体的に論じている。Crystal (1984)のように、分離不定詞が英語の詩学的手法の大黒柱的存在である「弱強五歩格」に則っていると、「英語らしいリズムである」とする、レトリックとの関連について示唆する研究も見られる。また、抽出した分離不定詞がどのようなストレスパターンをとるかについて量的に分類したというコーパス研究 (Calle-Martín and Miranda-García (2009))もあるが、いずれも雑多な用例を示すにとどまっている、主張を補強する用例が極めて少ない、などの問題点があり、より明確な手法や枠組みに基づいた調査がなされるべきであると思われる。

本発表では、リズムと分離不定詞との関連について体系的に記述・考察するべく、コロケーションの観点から、大規模コーパスである COCA を用いてケーススタディを行う。分析対象は、Jang and Choi (2014)において示された、分離不定詞として頻繁に用いられる splitter7 つを伴う分離不定詞である。①粗頻度②MI スコアの両方の観点から、"to+adverb (splitter)"の直後に共起する動詞をそれぞれ抽出したところ、いずれの場合も一連の構造の多くが Draat (1910)の示すリズムパターンに当てはまり、実際に「弱強五歩格」のリズムを構成しているものも多く見られた。このように本研究では、先行研究で表面的に指摘されていたが、実証されてこなかった分離不定詞の韻律の実態について、コーパスを用いて実証的に考察する。

精神作用を表す「腹」の比喩的意味の広がりについて —通時的観察と認知言語学的分析—

後藤 秀貴 (言語文化専攻博士後期課程 3 年)

精神作用を表す身体部位詞の比喩的用法は、ヒトが身体という実体を通じて精神を理解することを端的に示す言語的証拠として、身体性を強調する認知言語学者らの注目を浴びてきた。一方、Sharifian et al. (2008) は、身体と精神との結びつきにおける身体性を認めながらも、言語間の相違性については身体性のみでは説明がつかないとし、言語固有の表現を生む社会・文化的な要因の重要性を指摘している。本発表では、その固有性から社会・文化基盤が強調されてきた日本語の「腹」表現に関して (e.g., Matsuki 1995; 後藤 2015, 2018)、新たに通時的な変化を仮定し、従来 of 分析を歴史的資料に基づき、再検討する。

日本語の「ハラ」は、上代から腹部を指す語としての用例が見られ、比喩的用法としては中古からその例が見られる。本発表では、『日本国語大辞典』の「ハラ (腹・肚)」の子見出しに記載された精神作用に関する慣用句の初出例を手掛かりに、それらの中古～近代へと分類し、通時的な意味の一貫性・変化を分析する。なお、資料の補完として、類語や隣接部位を指す語、『日本語歴史コーパス』におけるその他の用例についても取り挙げる。主な論点は次の通りである。

1. 「腹」は、中古～中世における怒り・不満（「腹を立つ」、「腹脹る」）や精神の本性（「腹汚し」）などの限られた精神作用との対応に始まり、近世以降、度量（「腹が小さい」）や理解・納得（「腹に落ちる」）、考え・意図（「～という腹」、「腹の内」、「腹を探る」）、覚悟・決心（「腹を括る」）といった精神作用に対応を広げる。
2. 建前文化 (Matsuki 1995) のもとで一律に議論されてきた本心の隠蔽には、対人的配慮から来る感情（怒り・不満）の隠蔽と、自己の利害・都合から来る意図・考えの隠蔽があり、前者が後者に先行する。
3. 近世以降に現れる覚悟・決心に関する表現は、本来勇気と結びついていた「キモ」との隣接性に (Goto 2017)、腰肚文化（齋藤 2000）が相伴って成立したと考えられる。

量的考察の結果をいかに複合動詞の現場指導へ応用するか — 学術論文において使用頻度の高い複合動詞を試みとして —

高 娟（日本語日本文化専攻博士後期課程3年）

1. 問題の所在

複合動詞は日常の日本語の中で多用されているが、日本語学習者にとっては習得困難な語彙項目である。認知的な要因を考えると、辞書に載っている複合動詞の見出し語を一つ一つ暗記するのは非現実的である。母語話者の複合動詞の使用傾向を考察する必要があると考えられる。

先行研究では、複合動詞の後項動詞の使用頻度や教科書における複合動詞の使用傾向を調べる量的考察は、辞書の編纂や教科書への複合動詞の導入などには有意義なことであるが、具体的な教育現場では応用しにくいという指摘もある。

2. 先行研究との関連

高 (2014) では、母語話者による紙媒体の学術論文 30 本を電子テキスト化しコーパスを作成し、その中から複合動詞のデータを抽出し、学術論文における母語話者による複合動詞の使用状況について量的考察を行ったが、質的分析までには至らなかった。本研究では、高 (2014) を踏まえて、量的考察の結果をいかに複合動詞の教育現場に応用するかについての試みとして、考察を行う。

3. 分析方法と結論

まず、単語親密度データベースを用いて、高 (2014) の複合動詞上位 20 語の単語認知度を調べた。その結果、上位 20 語のうち 18 語が母語話者による単語親密度リストの最上位である。学習語彙として指導するのは学術論文の作成に有効であると考えられる。

次に、NINJAL-LWP for BCCWJ を使用し、上位 20 項目の共起関係やコロケーションなど複合動詞が使われる文脈での使用状況を考察した。考察の結果としては、複合動詞

のそれぞれの文脈での使用状況や難易度の考察を通して、学術論文を作成する際の教育現場への導入が可能であることがわかった。

参考文献

高娟 (2014) 「日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察」『日本語・日本文化研究』24 大阪大学大学院言語文化研究科 pp. 104-114

I Tを活用した日韓語学交流授業の事例

呉 恵卿 (国際基督教大学)

本研究の目的は、IT を活用したプロセス中心アプローチ (process-oriented approach) を韓国語学習教室に導入して、学生が社会的・相互行為的プロセスに積極的・能動的に参加できる国際間交流授業を実施し、これが目標言語や文化に対する学習者の異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence、以下 ICC) に及ぼす影響を考察することである。

外国語教育の究極の目標は学習者の ICC を高めることである。では、ICC は外国語を学ぶことによって「自然で」「自動的に」習得されるものなのか。従来、ICC は外国語学習を通して自然に身につけるものであるというふうに認識されていた。しかし一方では、外国語を習うだけで ICC が自動的に身につくのではないという認識もある。従来、外国語教室における文化的知識の習得は「知識基盤の教授法 (knowledge-based pedagogy)」、すなわち教師が目標言語圏の文化に関する知識を一方的に伝える形で行われてきた (Wright, 2000)。しかしこれは、①教師による間違っただけの知識伝達の可能性 (Chambers, 2004) がある、②一方的な知識の教授は目標文化に関する学生の興味を低下させる (Wright, 2000)、という理由で批判されている。

本研究では、社会的・相互行為的プロセスに積極的・能動的に参加するプロセス中心アプローチが学習者の ICC にどのように影響するのかを考察するために、このアプローチを援用した形の日韓交流授業をアクションリサーチとして行う。具体的には、オンラインによる異文化間交流授業 (Telecollaboration)、すなわちインターネット技術を生かした国際間交流授業を行い、この授業が学習者の ICC に及ぼす影響を考察する。

第3室(共通教育 A 棟 3 階 312)

Don DeLillo の *Zero K* におけるゼロの逆説

松宮 正義 (言語社会専攻博士前期課程 2 年)

ドン・デリーロの『ゼロ K』について、タイトルにもなっている「ゼロ」が記号として持つ逆説が、人体冷凍保存術による不老不死の獲得という、人類の究極の野望が持つほころびや、惑星的な壮大な時間軸の中で人間の生が持ちうる存在感を描き出すメタフ

ァーとしてダイナミックに機能する点を明らかにし、デリーロが最新作で描く生と死の問題系に迫りたい。

本作の主な舞台である、人体冷凍保存術開発に取り組む謎の施設「コンヴァージェンス」は、人間の身体と精神を全て初期化した「ゼロの身体」を創造し、聖書的な終末を乗り越えるポストヒューマンを作り出そうとする神秘的なトposだが、賛同する者に露ほども疑念を抱かせないカルト的な全体主義が停留する場でもある。「死がなくなった後の生」の価値は宙吊りにされ、また主人公の妻であり、この技術を施された Artis は仮死状態において自己と他者を巡る袋小路的な自問自答に陥るなど、デリーロは不老不死の野望が持つ危ういほころびを随所に散りばめている。

「ゼロ K」、つまり絶対ゼロ度は、冷凍保存術を象徴的に表すものだが、絶対ゼロ度があくまで計算によって規定された漸近線的な仮想の存在であり、冷凍保存においても実際絶対ゼロ度にはならないことから、この「ゼロ」というコードは冷凍保存の神話形成の一端を担うキャッチコピー的な役割を付与されている。しかし、先に述べた「ゼロの身体」のほころびを意識した際、理念的な概念である「ゼロ」そのものが、コンヴァージェンスの危うい神話形成をあぶり出すメタファーとして立ち現れてくる。

本発表では、不老不死の神話形成をあぶり出すメタファーとして「ゼロ」が持つ読みの可能性を模索することを主な目的としつつ、エンディングにも着目し、惑星的な壮大な時間軸を意識させる本作において、一瞬で明滅する生命が持ちうる無限の可能性を表象するコードとして「ゼロ」が最終的に昇華する点にも言及したい。

中国におけるヤオイの受容状況 ーノルウェーの青春ドラマを例にー

銭 蕾（言語文化専攻博士前期課程3年）

一般的には、ヤオイとは男性同士の恋愛関係を描いた女性向けの小説、マンガ、アニメ、ドラマ CD やゲーム、映画などの創作物を指し、近年では「ボーイズラブ」や「BL(和製英語 BOYS-LOVE の略称)」という呼称でも知られている。本発表の目的は、ヤオイに着目し、中国におけるヤオイの受容状況を解明していくことである。

ヤオイは、日本を起源とした50年近い歴史を持ち、1970年代の「花の24年組」による少女マンガでの少年愛作品が始祖といわれる。したがって、ヤオイは日本独特のサブカルチャーであるといえるが、現在では、日本にとどまらず、異なる言語と文化を持つ海外でも人気を得ている。中国では、実際に多数の若者が、男女を問わず、ヤオイを知っており、密かに多くのヤオイの愛好家が存在している。近年、海外におけるヤオイの受容状況に関する研究は増加傾向にある。しかし、研究対象は主に台湾、韓国、アメリカなどに留まっており、中国を対象とした研究はほとんどない。

本発表では、中国におけるヤオイ受容の一例として、ノルウェーの国営放送局「NRK」で放送された青春ドラマ『SKAM』を取り上げる。『SKAM』シリーズ自体は青春ドラマであり、ヤオイではないが、そのシリーズの中で含まれているヤオイ要素が話題となり、中国で注目されるようになった。そのドラマのヤオイ描写に焦点を絞り、中国にお

けるヤオイの受容環境を考察する。具体的には、まずそのドラマ『SKAM』のあらすじ、構成、放映方法などを示し、ドラマ『SKAM』の背景を概観する。また、ドラマ中に含まれているヤオイ要素に注目した上、何故、北欧の一ドラマが中国の若者の間で人気となったのか、また中国においてどのように受け入れられているのかを解明する。

増村保造の映画『卍』におけるレズビアン表象 ー谷崎潤一郎の原作小説との比較からー

徐 玉（言語文化専攻博士前期課程2年）

戦後日本社会では、旧来の社会体制と倫理観の崩壊によって、多様なセクシュアリティが展開していく。「レズビアン」という概念は60年代に定着し、様々なメディアによって語られた。またこの頃、テレビの普及によって映画観客が激減し、その打開策のひとつとして製作された性描写をセールスポイントとする「ピンク映画」がブームになった。こうした社会的、映画史的な文脈の中で、増村保造監督はそれまでタブー視されていたレズビアン題材に挑んで、映画『卍』（1964）を撮ったと考えられる。

『卍』は日本を代表する文豪である谷崎潤一郎の同名小説（1928-1930）に基づいたアダプテーション作品であり、柿内夫人（園子）と徳光子の同性愛を中心に展開する。本発表では、原作小説、シナリオ、映画作品それぞれの表現を比較し、アダプテーションの視点から60年代の映画におけるレズビアン表象を明らかにすることを試みる。

本発表では増村の『卍』と谷崎の『卍』を、主に以下の三つの観点から比較する。①メディア表現手法の相違。小説の中では女性同士の親密性が具体的に何と関連づけられ、どのような視点で語られているのかを把握した上で、シナリオ、映画における女性同性愛表象と比較する。この作業を通じて、映画という視覚メディアがセクシュアリティ構築において、どのような表現をしているのか、いかに小説と違う仕方でレズビアン表象を表現するのかを分析する。②時代背景の相違。原作と映画作品とは30年以上の製作年代の隔りがあるが、それが両者の表現の仕方にいかに影響しているのかを明らかにし、それと当時の社会状況との関係を考察した上で、60年代のレズビアン表象の特徴を究明する。③谷崎と増村のそれぞれの作品群における『卍』の位置づけの比較。それぞれの女性観や主題における当作品の位置づけを吟味しながら、この映画におけるレズビアン表象の特徴をさらに深く読み解きたい。

映画における「美女と野獣」

ークリストフ・ガンズ版（2014）を中心にー

西岡 恒男（神戸松蔭女子学院大学非常勤講師）

本発表は、200年以上にわたり世界中で親しまれているフランス発祥の物語「美女と野獣」の映画化作品を取り上げ、アダプテーション論の観点から分析するものである。同作は、最も知られている原作であるポーモン夫人版（1756）の発表以来、今日まで子ども向けの書物を中心にさまざまな再話作品が作られてきた。

映画化作品としては、ジャン・コクトー版（1946）が、「美女と野獣」の歴史においていくつもの点で画期をなすものとして、今なお重要視されている。また近年では、ディズニー・アニメ版（1989）がとくに有名であり、原作を大きく書き換えているものの、わが国でも原作を凌ぐ人気を誇っていることはよく知られている。

このような「美女と野獣」の映画化の流れのなかで、注目すべきは、2000年代に入ってから映画化・ドラマ化作品が多数製作されている点である（少なくとも7作品）。こうした流れを裏付けるように、ディズニーに至ってはアニメ版をリメイクした実写版（2017）までも公開している。

本発表では、アダプテーション作品として書かれた原作から映像作品へとメディアが変換されることにより、「美女と野獣」の物語がいかに変容したかを種々の視点から分析する。実際、その力点は各時代で変化しており、近年の映画化作品を考察することで、最新の傾向を知ることができる。

今回は、とくにフランスの映画監督クリストフ・ガンズによる『美女と野獣』（2014）を中心に議論する。コクトー版との影響関係やディズニー版との相違点などを指摘することで、ガンズ版の特徴を浮き彫りにし、近年の映像における「美女と野獣」ブームの要点を明らかにしたい。